

資 料

仙台大学創立25周年記念大学祭（平成4年10月31日 開催）

## 生涯スポーツシンポジウム

テーマ 「地方における生涯スポーツの現状と課題」

—産・官・学の果たす役割—

【基調講演】

### 「生涯スポーツと生涯スポーツ社会の実現に向けて」

講師 文部省高等教育局専門教育課長

前文部省体育局生涯スポーツ課長 本 間 政 雄

ただいまご紹介にあずかりました文部省の間でございます。仙台大学の創立25周年、本当におめでとうございます。私のような者に皆さん方の前でお話する機会を与えて頂きまして、本当にありがとうございます。ご紹介にございましたように、今年の7月1日まで生涯スポーツ課長をやっております、生来私はポストを点々とするジプシーのような生活をしておりましたが、そこに3年間おりました。いろいろ理由はあるようでございましたが、1番大きな理由は、平成2年12月に「スポーツ振興基金」というものができまして、法律を作って250億円の国費を投入しまして、オリンピックやアジア大会に勝てるような選手の養成に使おう、あるいは高齢者や中高年者の日常的なスポーツ活動を支援する目的に使おうということでございます。それと同時に、民間企業からもお金を頂きまして、その運用益、年間20億くらいのお金をスポーツ団体に回そうということでやってまいりました。私が募金活動の担当になりまして、1社1億円の募金を集める仕事をしていたわけです。100億円集めるというのは簡単なようで

なかなか大変でして、1年半駆けずり回りまして、やっと今年の7月に44億5千万円ということで、四捨五入して50億円、目標の半分を集めたからもういいだろうということで卒業させて頂いたわけです。それまでは、生涯スポーツ、生まれてから死ぬまでスポーツに親しめるような、そういう条件整備をし、そういう環境を作っていく、そのような生涯スポーツを、おまえは生涯、スポーツ課長をやれ、死ぬまでスポーツ課長をやれと言われてきました（会場笑い）。

今の仕事は生涯スポーツとは相当違う仕事ですが、生涯スポーツに対して関心もございますので、機会があればその振興や生涯スポーツ社会の実現のために何が一番大切なのかということをお話ししたいと思っておりました。今日お集まりの若い皆さん方、体育学部というスポーツに大変関わりの深い、そういう勉強をしてこられた方々に、こういう話をする機会を頂きまして大変幸せに思っております。

まず第一にスポーツの多様な意義と価値といったことから始めたいと思います。体育やスポーツを選択している方々に、スポーツがいかに

に素晴らしいものであるかをお話しするのは大変お恥ずかしいのですが、それにしても、今、スポーツというものが持っている様々な価値というものが見直されてきています。スポーツはすこやかな心と体をつくるのに役立つ。私は昔イギリスにいたことがあります、イギリス人が大変誇りに思っていることに「トラファルガーの海戦」というのがあります。今から170、80年前のことで、それに勝ったことが、大英帝国の繁栄につながったのですが、「トラファルガーの勝利はラグビー校の庭から生まれた」と言われています。ラグビー校というのはイギリスで有名なパブリックスクールです。「パブリック」といっても私立の中等学校で、イギリスの首相も随分多くがこのラグビー校の出身で、ラグビーが生まれたということでも大変有名なところですよ。スポーツは苦しさで打ち勝ち、目標に向かって努力をするという価値をもっている。あるいは今のスポーツ界を見ますと相当忘れられているのではないかと思うのですが、ルールを守るといって、卑怯なことはしない、審判が見ていないところでも違反はしない。負けても卑屈にならない、勝っても驕らないということです。私はよくゴルフをするんですが、ゴルフをして勝つとよく「お前のおごりだ」と言われる（会場笑い）。勝って驕ってはいけません。勝者の驕り、やはり謙虚にすべきですね。こういうスポーツにとっての価値というものはあるわけです。

行政的な観点からみましても、スポーツにはさまざまな価値があるわけでございます。先程、文部省に生涯スポーツ課ができたのは4年前だと申し上げましたが、4年前に生涯スポーツ課ができたとき、生涯学習局も同時に発足しております。文部省は生涯を通じてスポーツや文化活動や学習活動に親しめる条件を作らなければいけないということですからかなり思い切った改革、組織改組をしたわけです。通産省の統計によりますと、いわゆるスポーツ産業、スポーツウェアや用具、用品を作ったり、スポーツ施設

を作ったり、スポーツ・スクールといったもの、ゴルフ場とか、スイミングクラブとか、ヨットクラブとか、民間スポーツビジネスといったものを経営する、この市場規模が4兆2千億円に達しているんですね。これが平成12年、西暦2000年までに通産省の目標で12兆円まで増やしていこうとしている。現在、4兆円という繊維産業と同じくらいの規模です。このスポーツ産業というのは大変伸びるというわけで、通産省はより積極的に推進していこうと考えております。

あるいは厚生省というお役所がございますけれども、いろんな仕事をしておりますが、1つは高齢者福祉です。もう1つは国民の健康増進で、すこやかで明るい生活を送れるということ。あとは社会的弱者の救済です。障害者の方々に対してさまざまな対策を行うということです。先程、朴澤理事長のお話しのなかにありましたが、まさしくその通りで医療費がどんどん増えていってわけでございます。それと同時に高齢化が進行するという状況になっている。ちょっとOHPで見ますが、高齢化のスピードは今、世界一のスピードで、私は昭和23年の生まれです。44歳ですが、私が役所を首になる65歳ぐらい、今から20年後ですね、高齢者人口がピークに達するという状況でございます。

いまOHPをご覧くださいましたが、日本の場合、ドラマチックに65歳以上の高齢者の人口が増えてゆく、いわゆる高齢化社会の進行が進んでいます。ということで厚生省としては2つの観点から非常にスポーツに関心を持っています。1つは健康増進に関するもので、高齢者は自然に病気を患う、あっちこっち故障が出てくるわけです。しかし、スポーツを定期的に行うことによって、そうした病気を防ごうということで、ここに着目しています。厚生省も昔は高齢者対策という、おいしいものを食べて、民謡を歌い、温泉に入っているのんびりする、これが健康管理だったわけです。今は健康3要素といって「栄養」と「休養」と「運動」の3

つです。「栄養」「休養」は昔から変わりませんが、これに対して「運動」が入ってきた。死ぬまで健康に運動やスポーツに親しんで頂ければ一番いいということで、具体的には、長患いをせず、寝たきりにならない、またボケ老人にならない、これが厚生省の理想なんですね。

同時に、障害者の自立の手だてとしてのスポーツということがあります。障害者の方が、ハンディキャップを克服していくのを支援しなければならない。と同時に「健常者」と言われているわれわれとの交流ができるということで、まず身体障害者から始めていますが、最近、精神障害者のスポーツ大会も厚生省が行っています。

例を挙げていきますと、霞ヶ関の省庁は全部がスポーツと関わっているわけです。きりがないんですが、運輸省であれば最近、空を飛ぶスポーツに大変関心を示すようになってきました。またヨットとかクルーザーとか、これがだいたい全国で25万隻ありますが、係留施設が5万隻分しかない。そこで不法に放置されているヨットとかクルーザーとかが増えてきているという現実的な問題もあるわけです。それ以外にも海でするスポーツは可能性としてはずいぶん広いわけです。海というのは、遊びやレクリエーションと同時に漁業をするとか生産の場でもあるわけです。これまで生産と貨物輸送というと、生産に関わっていることが優先されて海上交通体制というものができあがってきました。しかし、やはり日本人の生活水準が上がってきて、スポーツに親しもうという人が増えてきたわけです。海を遊びの場にしたいという。このことは空でも同じなんですね。空はこれまで旅客輸送、貨物輸送、あと軍事関係ですね。自衛隊が独占的に使ってきたわけです。ところが楽しむために空を飛ぶ人がどんどん増えてきました。一番大きいのはパラグライディング、ハンググライディング、それから熱気球、最近はウルトラ・ライトプレーンとか、パラシュート・プレーンとか、どんどん新しいものができているわけ

です。航空法をみてみますと熱気球は何と書いてあるかというと、「空中浮遊物」と書いてあるわけです。これはクラゲみたいなもので、ゴミなんですね。それほど今までの航空行政というのはまったく遊ぶために空を飛ぶことなどは軽視してきた、プライオリティがまったく違うわけなんです。旅客、生産につながるような貨物輸送を最優先させる、こういった状況なんです。

それから建設省ですが、ここへ来る途中にも名前は知りませんが川がありました、そこに河川敷というのがあります。野球をやっているけれども、河川敷を運動施設に使っているところは実に多いんですね。河川敷は法令によって恒久的な構造物は作れない事になっています。しかしテニスコートとか野球場というものであれば、これは恒久的な構造物ではないので、どんどん造れるわけです。そこで河川敷にゴルフ場を造ったり、野球場を造ったり、テニスコートを造ったり、ゲートボール場を造ったりするのが非常にはやっているわけです。建設省の河川管理という観点からいいますと、やっぱり河川に親しんでもらうというのは非常にいいことなんですね。したがってそういう観点から、建設省も、護岸というと昔は日本の国土を守るという観点から、コンクリートの堤防を造って波で侵食されるのを防ごうという状況だったんですが、今は渚シンポジウムなどを開きまして、海に親しんでもらう、というのが建設省の方針になっているわけです。そこで釣りなんかができるようにと岩場を造ったり、そういうようなことをする時代になってきています。

外務省もスポーツによる国際交流というのを積極的に進めています。国際交流というとなかなか難しいんですが、スポーツというのは言葉がいらない。アルゼンチンから来た子どものサッカーチームが日本の小学校のサッカーチームと会ったその瞬間からゲームができる。こんな素晴らしい国際交流はないわけです。したがって、宮城県でもそうだと思いますが、いくつか

の市町村ではスポーツを通じた国際交流というのがどんどん進んでいるんですね。外務省も現にそういうスポーツ交流を進めています。モンゴルからモンゴル相撲を呼んでくるとかですね、それくらいスポーツというのは大変注目されているということをまず頭に入れておいて頂きたいと思います。

次に「生涯スポーツ」ということで、よく「みんなのスポーツ」とか「Sports for All」とか言われますが、「Sports for All」を「みんなのスポーツ」と皆さんよくおっしゃいます。これは大賛成なんですけど、「みんなのスポーツ」というのは間違いじゃないんだけれども、「みんなのスポーツ」というと「Sports for All」という言葉が持っている強い政策的な、積極的な意味合いが出てこないんです。私、イギリスに暮らしてイギリスの教育制度に非常に関心があって勉強したんですが、すぐに「Education for All」という言葉が浮かんでくるんですね。「Education for All」を「みんなの教育」なんていう人は一人もいないわけですし、「Education for All」というのは「すべての人に教育を」ということなんです。「すべての人に教育の機会を与える」ということです。「Sports for All」であれば「みんなにスポーツを」ということです。

これは皆さんは信じられないことかもしれませんが、中等教育、日本では高等学校ですね、これが94パーセントの子どもたちが18歳まで教育を受ける、これが当たり前だと思っただけで、こんな国はおそらくアメリカを除く世界中のどこにもない。18歳まで教育を受けているというのはイギリス、ドイツ、フランスへ行ったらって同世代のだいたい6割くらいですね。やはりこれではだめだということで、すべての子どもたちに、せめて15歳、16歳までは教育の機会を与えようということで、それが「Education for All」となったわけです。そういうふうに言われている「Sports for All」という言葉ですが、すべての人にスポーツの機会

を与えようではないか、こういう考え方なんです。

なぜこれがそう言われるようになったか、スポーツなんて誰だってできるんじゃないかと皆さんそう思うかもしれませんが、そうではないんですね。なぜ違うかという、これは近代スポーツの発祥地といわれているイギリスの状況をみると、よくわかります。スポーツは、あれは「男性のものだ」という意識がものすごく強いんですね。今日、仙台大学は女子学生は15%ほどいて最近増えつつあると聞きましたが、こういう状況じゃないんです。サッカー、ラグビー、ゴルフ、テニス、みんな男性がクラブを作ってやってたんです。女性はそこから弾き出されていました。今から30年くらい前、いや20年くらい前でもいいです。いま皆さん方がテニスラケットを持って、結婚してから女性の方が、旦那が一所懸命働いている間に昼間テニスクラブなんかに行っても、そんなに白い目で見ることもないと思います。しかし、20年前くらいだったら、家庭の主婦がテニスラケットを持って、うちを放っぱらかして出るというのは、まずうちに姑さんがいましたから、ちょっとそんなことはできないわけです。フィットネスクラブへ行ったり、スポーツを楽しむなんてことは、まずできない。それ以前に今みたいに電化製品が入っていませんからそういう余裕はなかったわけです。私がちょうど小学生くらいの時に電気洗濯機が入り大変喜びました。冷蔵庫はそれこそ大変でした。今、皆さん方が生活の中で当然だと思われるようなものが、20年前、30年前には全く無く、その意味で、家庭の主婦はやることがいっぱいあったわけです。かりに時間があってもそんなテニスラケットを持ってゆくなんてことは社会的に許されていなかったのです。すぐに近所の人から後ろ指を指されるということがあったわけです。わが国でもそのようなことがありましたが、イギリスではそれ以上の状況にあったわけです。さらに高齢者や都市のスラムといわれるような所に住んでいる人たち、

あるいはイギリスのマイノリティですね、外国人の人口がだいたい1割に達しておりますが、こういった人たちの間にスポーツの機会が保証されていない。社会階層によってもまたずいぶん違うんですね。労働者階級はなかなかスポーツをする機会が経済的にもないということで、やっぱり「すべての人にスポーツをする権利がある」ということからスポーツを勧めていこうということで、「Sports for All」となったわけです。

そこで、わが国の状況ですが、私どもは「生涯スポーツ」という言葉を使っています。実は私はベストの言葉だとは思っておりませんけれども、「生まれてから死ぬまで生涯にわたって、それぞれの目的と能力に応じてスポーツに親しめる」という意味では「生涯スポーツ」という言葉でもいいのかなと思っております。基本的には「いつでも、どこでも、だれもが、やりたい時に、その目的に応じてスポーツができる」というのが理想的な状況だと考えています。

今、「スポーツブーム」ということがよく言われております。たとえば10月10日は体育の日ですが、この日のテレビ欄を見ると、スポーツ番組だけで午後、夜寝るまでゴルフ、野球、バレーボール、サッカー、大相撲、いろいろと放送されている。それくらい非常に人気がある。それから、普段の生活をみましても、スポーツが趣味だという人はたいへん多いですね。ゴルフ場はどんどんあちこちに出来ていますし、スイミングクラブ、フィットネスクラブは大盛況です。そういうことで、「スポーツなんてのは個人が個人の負担において、好きな時に好きなスポーツをやればいい。国がとやかくすべきことではない。だいたいそもそもスポーツブームで、みんなスポーツに十分親しんでいるではないか」というようなことも一部に言われています。しかし現実にはそういうことにはなっていないんですね。

スポーツ人口は、平成3年度、6千万人、実施率66パーセントになっていますが、これは、

「あなたは1年間に1回でもスポーツをしたことがありますか」というふうに聞いての答えです。ウォーキングでもいいんです。潮干狩りでも海水浴でもキャンプでも、何でもいいんです、スポーツやレクリエーションであれば。それに「1年に1回やったことがあるか」と聞けば、まあ皆さん方は授業であるわけですから当然やっているわけですが、大人でも「付き合いゴルフ」なんてものがありまして、散歩くらいはやりますからね。1年に1回もスポーツをやらない人はほとんどいないわけです。

社会人のスポーツの頻度は72.5%。4人に3人が1年に1回くらいスポーツをやっているということです。問題は、スポーツをやっていると言えるのは1週間に1回以上ですね。そうすると24~25%です。スポーツを身近に親しんでいるという目安が1週間に1回となると、スポーツを4人に1人しか楽しんでいないということなんです。これが私のいう「掛声と現実のギャップ」ということです。学生の場合には、授業があるわけで、これも大学改革の一環として、必ずしも大学を卒業するのに保健体育を取らなくたっていい、ということがございます。それでも若い人は学校の中で基本的にはスポーツに接する機会があるから、あまり問題ではないわけです。

このように1週間に1回以上のスポーツを楽しむ、そこにそれこそスポーツの価値というのが発揮されると考えまして、私どもの目標としては、この1週間に1回というのが4人に1人というのを10人のうち6人から8人に上げたいと考えています。残りの2人くらいの方は、仕事が超多忙、つまり宮沢総理みたいな方ですね。5、6年くらい前、柏木由紀子さんって知ってますか、坂本九ちゃん、死んでしまいましたけど、あの方の奥さんですけれども、その方が体育の日の行事に参加された海部総理に、「総理、最近運動をされていますか」とインタビューされました。それに何と答えたと思いますか。「いやあ、最近は選挙運動ばかりでして」と答えた

そうです（会場笑い）。選挙運動っていうのは大変な運動なんです。両手で握手しますからね。まあ、ああいう超多忙な方ができないというのはしょうがないですが、あるいは高齢で体を動かすのがやっとなという方、あるいはスポーツが大嫌いという方は10人いれば2人か3人くらいはいるんです。そういう人に強制するのが生涯学習や生涯スポーツではないんですね。やりたい人がやりたい時にということです。そんなことで10人のうち6人から8人ぐらいの方が、やりたいと思った時に実際スポーツ施設があって、スポーツの機会を増やせるというのが理想であると思っていますし、現実にはイギリスとかドイツみたいな生涯スポーツ先進国でも、そのくらいのところに目標を置いています。10人のうち6人から8人ぐらいの方にスポーツに親しんでもらうっていうのは大変なんです。そこで何をしたらいいかというと、「なぜあなたはスポーツをしないのですか」とこれを聞くのにかぎるわけですね。あるいは逆に「なぜスポーツをするのですか」ということを聞くんです。「なぜあなたはスポーツをしないのですか」と聞きますと、「時間がないから」という人が10人に6人です。時間がないから、忙しいから、あるいは仕事に忙しい、疲れた、休みはもうごろ寝でもしたい、という回答が返ってくる。「施設がない」、「指導者がいない」、「機会がない」というのであれば、施設を増やせばいいんだということになるんですけれども、そういう人ももちろんいるんですが、圧倒的に「時間がない」という人が多い。「時間がない」からということになりますと、時間がないといって時間を創るわけにはいきません。

時短がどんどん進んでいます。日本人の年間総実労時間は2100時間です。フランスですと5百時間短い、1600から1500時間です。そのぐらいの差があります。いま政府としては、年間総実労時間を1800時間まで減らそうということ而努力しております。私個人ですけれども、ようやく完全週休2日制に入りましたが、昨年有給

休暇を25日間とりました。文部省の役人の平均的な有給休暇よりも8.5日多かったわけです。弁解するわけではないんですが、生涯スポーツ課長というのは週末にあっちこっち大会に行ったりするんです。そういうふうに時間のない人は時間を自由にはできないんですが、もちろん社会全体として余暇時間を増やす努力をしなければいけないわけです。

私はよく考えてみたんですが、自由時間とスポーツをどれくらいの頻度でやるか、必ずしも正の相関があるわけではないんですね。時間のない人ほど一生懸命スポーツをやっているという結果が出ていますね。時間がない人ほど朝のジョギングをやったり、フィットネスクラブへ入ってトレーニングをやったり、時間をみつけてテニスをやったりしています。統計的に考えてみますと、質問が悪いのではないかと思います。時間がないからというのは言い訳ではないか、スポーツを取り巻く環境に問題があるんじゃないか。具体的に言いますと、近くに使いやすい施設がない、そうすると遠くまで行ってそういう施設を使う。あるいは近くにあっても申し込みの手続きが非常に面倒だということなんです。身近に、歩いて行ける範囲に気軽に使える施設がもっとあれば、おそらく時間がないということではなくて、スポーツをするんじゃないかと思うんです。

いずれにしても生涯スポーツのこのカテゴリーの中で、私の考えではハードとソフトの両面にわたって非常に大きな努力が必要だと思います。まずハードの方ですが、スポーツをする場所なんですね、場所。これは誰もが利用できる球場とか、テニスコートとか、ゴルフ場とか、あるいはスキューバダイビングのためのダイブ・スポット。あるいはサイクリング、私も好きですが、サイクリングロードの整備とかですね。自然破壊を心配せずに、マウンテンバイクを乗り回せる、そういう場所です。

私どもの調査、7年ぐらい前で古いんですが、全国のスポーツ施設数は29万2千ヶ所です。学

校の施設が半分以上です。それから公共のスポーツ施設、民間がやってる施設、企業が持っている施設、あるいは公共法人が持っている施設です。その中で一番増えているのは公共のスポーツ施設と民間のスポーツ施設です。都会を中心に民間スポーツ施設が増えてます。少ない面積でたくさんの人間が来る施設でございますが、一番多いのはプールです。運動量も非常に多く、狭いところにどっと放り込んでも運動量が多いから30分くらい泳いでどんどん回転していく。それに比べるとゴルフは非常に回転の悪いスポーツですね。あれだけの土地を使って1日やって250人ぐらい、プールだと250人ぐらいだと1時間ぐらいですよ。それくらい回転の効率が高い。まあ、都市に立地する地価の高いところでは回転のいいスポーツでないとだめですね。あとは室内トレーニングやエアロビクスなんかですね。これらが4年くらいの間に倍増している。

それと公共スポーツ施設。地方自治体がスポーツを核に町の活性化を図ることがものすごく増えているんですね。信じられないほどです。なぜスポーツかといいますと、地方自治体はいま過疎化と高齢化で悩んでいます。どこの町でもそうです。どんどん若い人が町に出て行って、お年寄りばかりになっている。人を集めて元気を出したい。みんな健康で元気になるスポーツ。生涯学習でもいいんですが、生涯スポーツですと理屈なしに誰でも参加できるんです。ゲートボールとか、ゴルフとか、テニスとか、いろいろ違いはあるんですが、誰でも参加できる。しかも交流大会を開ける。たとえばトライアスロンの大会、あれをやることによって日本中から屈強な若者がどんどん集まって来る。そこでイベントとしてこれをやるんですね。あるいはいま人気のあるジョギングやマラソンですが、実は全国で、千人以上集まるジョギング大会やマラソン大会はハーフマラソンを含めて3千以上開かれていると言われています。これは全国の自治体が3261ですから、1つの自治体が

1年に1回、千人以上のハーフマラソンやフルマラソンの大会を開くような計算になるんですね。そのくらい生涯スポーツというものに取り組んでいるわけです。東京都、これは過疎地ではなく過密都市ですが、2年間の公共建築物の動きをみてみますと、去年の3月に、綾瀬という所に武道館ができて70億円、千駄ヶ谷にあります温水プール、レストラン、屋外陸上競技場、トレーニングルーム、室内体育館、これを造って230億円です。あとは芸術関係がものすごく多いんですね。東京芸術劇場や池袋、北区、葛飾区にもりっぱなのができています。

東京都の例を挙げましたが、宮城県の本間俊太郎知事の町にバッハホールがありますが、大変失礼ですが、ああいふ田舎でもりっぱな芸術・文化施設を造ると同時に、スポーツ施設が増えているんですね。生涯スポーツ課長を3年やって全国を周りまわしたけれども、これは肌で感じたことです。それ以外にも国体とか、高校総体とか、そのたびに立派な施設ができる。あるいは今後10年間を展望しても広島のアジア大会が2年後、ユニバーシアードが福岡、長野のオリンピックが6年後、それからいま西暦2002年にワールドカップ・サッカーを招致しようとしている。こういう中で施設がどんどん増えている。文部省の調査で、いま全国で、国と地方自治体がスポーツ施設の建築に使っているお金は、文部省と教育委員会だけで年間で3,500億円くらいです。これを建設省などと合わせると相当な額にのぼりそうです。スポーツ施設の数はい間違いなく全国的に増えていくと思います。

問題は、公共スポーツ施設の運営のあり方、それから民間のスポーツ施設の料金が高いことです。公共のスポーツ施設の場合、皆さん方はあまり使っていないので実態がよく分からないかもしれませんが、私は勤務先が千代田区ですから日比谷公園のテニスコートを利用していますが、手続きが非常にややこしいんですね。安いいけれども、めんどうです。なかなか予約が取れないんです。たまにトレーニングなんかに行

くと、従業員の方がたいへん不親切。たとえば、まず事務所に行って1時間分の料金350円を払い、野球場使用料が1500円、消費税45円、領収証に名前と住所を書いてくれと言うわけです。民間スポーツ施設だとういうことはありません。お金さえ払えば先着順に申し込める。客が来る時間はできるだけ開いています。24時間オープンで開いているところもあります。公共のスポーツ施設ではこういうわけにはいかない。公共スポーツ施設というの、はっきり言って、お客は少ない方がいいんじゃないかと思ってるくらいだと思うんです。客が少なければ施設が傷まない、汚れない、管理も楽です。民間スポーツ施設ではこうはいかないわけです。お金がなければ自分たちの生活が成り立たないので、一生懸命サービスする。公共スポーツ施設というのはその点においてかなり問題があると思います。

しかし公共施設も少しずつ変わってきました。何が変わってきたかという、ひとつ福岡市でやっている例をご紹介します。公共スポーツ施設を利用するための情報ネットワークです。コンピュータシステムを使って、地下鉄の駅とか、公共施設の端末を叩いて、リアルタイムで野球場とかテニスコートの空き状況がわかるんです。何月何日の何時から何時までこの施設は空いてますか空いてませんかと聞ける。コンピュータの端末（キャプテン）から申し込みができる。申し込みが登録されていてコンピュータで抽選をやって、1週間なら1週間後にキーボードを叩くと結果がわかるんです。それから銀行の引き落としでお金を払う。このシステムを導入したことによって、公共スポーツ施設の利用が一挙に今までの30倍にもなっています。もう1点、この情報ネットワークを使うことによって、たいへん評判の悪い役所の縦割りが改善されるんじゃないかと思っております。役所は縦割りになっているのが特徴なんですね。通産省でも文部省でも一緒。文部省の中で

も何局は何局、何課は何課、何係は何係となっていて、あとは知らんということになっている。これが官僚制と言われているものです。同じ公共施設であっても教育委員会のものと民生部がやってるスポーツ施設、あるいは公園緑地課がやっている施設、これは管理がばらばらですね。申し込む窓口も違うし、料金も違う、全部違う。だから同じ野球場であればすべて教育委員会で管理すればいいとわれわれは思うんですが、それができない。しかし、この情報システムを導入することによって一元化できると思います。それは費用のメリットがあるからですね。同じコンピュータを導入して1千万円かかるとしたら、コンピュータの端末が増えていくことによって、1つのコンピュータ端末当たりのコストがどんどん下がっていくわけです。同じシステムを使って30ヶ所しか使わないより300ヶ所使ったほうがいいわけです。経済効率の原理です。こういうシステムを導入したことによって、財政およびスポーツ施設の管理の一元化、両者にとって極めて都合がいいわけです。

時間がまいりまして、施設のところで終わります。レジュメに書いておきましたけれども、ソフトの面、皆さんと非常に関係のあるスポーツ指導者の問題とか、イベント、スポーツ団体を取り巻く問題がありますね。それから生涯スポーツ社会を実現していく上で、企業の方の後援というか支援活動ですね。たいへん重要なものになっているということです。それからハードとソフトですね。指導者やイベント、スポーツ団体、そういうものとハード、これをいかにうまく組み合わせていくかという問題、たいへん大きな問題なんです。あとでディスカッションの時間があれば少し話をしたいと思っております。ちょっと話が長くなりましたけれども、これで私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）



## 【産・官・学からの提言】

## 「生涯スポーツへの宮城県の取り組み・将来展望と課題」

提起者 宮城県教育庁保健体育課長 宮 崎 幹 男

ご紹介頂きました県の教育庁保健体育課長の宮崎でございます。私はこういうシンポジウムとか、シンポジストとか、初めてでございます、たいへん緊張しております。おまけに、前の課長さんでいらした田中（良）先生の前でたいへんやりにくい（会場笑い）。

いま県の保健体育課では生涯スポーツの推進という意味でどんなことをやっているのかということをお話ししていきたいと思います。まず「生涯スポーツ推進事業」という言葉で謳っているものがございます。これは文部省の補助をいただいて、各市町村でやって頂いている仕事であります。一つは学校体育施設の開放事業ということをやっております。各地域の小・中学校の施設、主に小学校であります、そのグラウンドや体育館を地域の方々に大いに活用して頂こうということです。それから、たとえば、親子スポーツ活動とか、少年スポーツ活動、婦人スポーツ活動、高齢者スポーツ活動、勤労青年スポーツ活動とか、こういったスポーツ活動を各市町村でもって展開して頂こうということでやっている事業がございます。それから地域スポーツ・クラブ連合の育成という事業。これは地域ごとにいろんなスポーツ・クラブがあるわけでございますけど、それを一体的に町の中で組織する、そういった組織を育ててもらおうという事業でございます。また市民スポーツ相談普及促進事業と言われる事業がございます。それから先程お話しがありましたように、生涯スポーツ国際交流事業、外国と行ったり来たりということでスポーツ交流を行う、そういう事業があります。この柴田町でも引き受けてもらっております。それから中高年スポーツ活動、あ

るいはスポーツ活動推進地域指定事業、これは今年から始まった事業でございますが、そういったものを文部省から補助を得てやっているわけでございます。今年、平成4年度で県内29の市町村でやっているものでございます。これらは生涯スポーツ推進事業というふうに位置づけてやっております。

次に、手元の資料にございます、「みやぎヘルシーふるさとスポーツ祭」というのがございます。これは次の「各種生涯スポーツ関連事業」の一つと考えておりますので、ここを一緒に話をしたいと思います。県単独で県内の生涯スポーツを振興する上での、これは目玉商品とも言えるものでして、県内には仙台市をはじめ教育事務所が7つありますが、7つの教育事務所それぞれで、管内の市町村が当番制で地域を周りながら、いろんな手軽で身近なスポーツを楽しんで頂くという、そのグループの中での市町村の交流大会ですね。スポーツ交流大会などをやらしてもらおうということで考えております。市町村対抗でやれる、各世代にあったスポーツ交流ができる、それから管内で普及している新しいスポーツ、ニュー・スポーツといわれるものの発表とか競技ですね。その他、いろいろな工夫を各地域の事情に応じてやって下さいということで展開しております。

それから、関連事業ということで、今年で5回めになりますが、「全国スポーツ・レクリエーション祭」、これに対する選手の派遣ということがあります。本県からは160人前後の選手を派遣しております。いわゆる国民体育大会が競技選手の大会とすれば、これは生涯スポーツといった意味での国民体育大会というふうに考

えてもらえば宜しいかと思います。グラウンド・ゴルフとか、ゲートボール、壮年サッカー、ソフトバレー、ラージボール卓球、ボーリング、綱曳き、年齢別テニス、ソフトテニス、年齢別のバドミントン、マスターズ陸上、インディアカ、こういったような種目でもって、いわゆる勝負にとらわれることなく楽しむということでやって頂いております。宮城県の手は概ね負けっぱなしですが、開催県を中心といたしまして、勝とう勝とうという意識が強く出されているやに聞いております。生涯スポーツというのは、勝つということをあまり表に出さないような展開であってほしいと思っております。

それから県では、指導者の研修事業やスポーツ教室の開催も行っております。スポーツ教室というのはご承知のようなイメージでいいわけですが、県では各県営施設を使ってスポーツ教室というものを開催しております。それから市町村は市町村でスポーツ教室を開催しておりますし、先程、ご紹介しました生涯スポーツ推進事業ということで、文部省からの補助金を受けてのスポーツ教室もございます。日本体育協会とタイアップしてのスポーツ教室もございます。また町の地域のスポーツ教室というものもございます。そういったものの支援をしているわけでございます。

それからスポーツ少年団への支援もあります。県内には約1100団体あり、スポーツに関わる子ども達と指導者、約3万人が登録しています。もともと東京オリンピックの頃に組織されたものですが、最近は少し過熱気味で、たとえば野球の少年団では年間60試合を行っているところもあるぐらいで、常識では考えられないと思います。いろいろ問題を含みながらも、けっこう盛んになってきているようです。

それから市町村の体育施設の整備に関する推進事業。また指導者のことですが、県では派遣社会教育主事スポーツ担当という人を各市町村に派遣していますが、今8人でございます。8人という数は少ないと思っております。全国

的なレベルで文部省にも陳情して人数を増やしてもらおうとしています。それから体育指導委員ですが、スポーツ振興法の中に位置づけられた市町村教育委員会の非常勤職員です。現在、県内には1137名の体育指導委員がいて、町のスポーツ大会、スポーツ行事の企画・立案・運営のお手伝いをして頂いているわけでございます。いわゆる地域の生涯スポーツの推進ということに関しましては、派遣社会教育主事、あるいは体育指導委員、公民館の社会教育課の職員、それから町の体育協会に加盟している組織の指導者の方々、そういう方々によって具体的には企画・運営されているわけでございます。

問題は生涯スポーツの将来展望と今後の課題ということになりますが、この点に関しては私の考えで話を進めたいと思います。今回、中学校や高等学校の教育課程が改定されまして、生涯スポーツや生涯体育を強く意識した改定になっています。個人の生涯にわたっての、生活の内容として、自発的、自主的に行われる運動とかスポーツというふうに位置づけられております。これまでは私どもが学校で授業をやる時、今日はこういうことをこういう基準でやりますよという具合に、ほとんど生徒が選択する余地なくやらせてきたと思います。そういうことではなく、子どもたちが自発的、自主的に行う、選択制の導入ということが位置づけられ謳われています。自主性といういろいろな問題がありますが、そのような方向でこれからは進むこととなります。そこで、先ほど本間先生のお話の中にもありましたが、やりたい時にやりたい人が、手軽にすぐにスポーツをやれるような、そういう整備をしていかななくてはならないのですが、そう簡単ではないんですね。私達や特にこれから体育の教員や指導者を目指す者にとっては、いまの子どもたち、小・中学生や高校生の意識を変えるためにどんな助言ができるか、ということが重要になってきます。そのことによって、生徒が自分で潤いのある豊かな充実した一生を送るためにどんなふうにスポーツとか

運動に親しんでいくのがいいのか、ということが考えられるような、身につけられるような指導者がこれから求められると思います。学校の指導者はもちろんそうですし、地域の指導者でも、公民館等で働く人であっても、すべてそういうことが要求されるのではないのでしょうか。私、一番問題だと思っているのは、例が悪いかもしれませんが、ゲートボールの指導ではないかと思っております。いっときゲートボールをやるためにたくさんのお年寄りがコートに出て参りました。今はまた自宅に引っ込みつつあります。一度ゲートボールの大会を見たことがあればよく分かると思いますが、監督の方々というのはすごくおっかないですね（会場笑い）。第1ゲートを通らなかっただけで、ボロクソ言

われるわけです。お年寄りになってまで、あんなことで怒られて、スポーツは楽しいものなんだろうか（会場笑い）。いろいろなスポーツをしないで育ったお年寄りの方々が今、スポーツをやろうとしてきたわけですから、そういった方々に最大限楽しんでもらえるような指導でなくてはならないわけです。そうでなければ、下手な人はすごすごと家に帰ってしまうわけです。みんな楽しく、それこそ下手な人もみんなで持ち上げて、何のためにやっているのかをみんなで考えていくような指導が大事ではないかと思えます。そういった意識を変えていくという意味で、指導者が非常に大事ではないかと思えます。以上、雑駁な話をしましたけれど、これで終わりにしたいと思います。（拍手）

## 「柴田町における生涯スポーツの現状と課題」

提起者 柴田町教育長 鈴木 貫

ご紹介を頂きました鈴木です。私は大正14年生まれの67歳で、ここにいる中では一番の年上かと思えます。ただ、私が以下に話そうとするのは、この67歳であるということと関係あるんです。と言いますのは、私は会津で育ったのですが、旧制中学の時、徹底して朝稽古から夜稽古までさせられて、体には自信がありました。私は50歳の時に胃袋を取りました。胃袋を取って2日目に、どうしても寝ていておしっこができなくて、「立って便所に行く」と言ったら、お医者さんは「それは無理だよ」というのです。しかし、女房と妹に連れていってもらって、ジョロジョロと出したら、気持ちが良かったこと（会場笑い）。その時に私は、ある一定の年齢までの間につけた体力というのは死ぬまでも

つ、こう自分の知識として感じました。

柴田町では昭和57年から生涯教育推進協議会という会を作りまして、町民は生涯教育についてどんな考えを持っているかを検討して頂きました。10年ばかり検討して頂いて、今年の3月に最終答申が出たんですが、案件はいろいろございます。社会教育の分野から、家庭教育、職業教育など、いろんなことがありましたけれど、最終的に一口で言いますと、われわれの健康が生涯学習の基本である、生涯学習の基本は健康だということなんです。その健康に関わることをやり易いように行政は考えてくれということなんです。一つは病院だと。一つはスポーツのやり易い施設を造ってくれと。なお切り込みの角度として、一番心配なのは、将来を担う後

継者。彼らがスポーツに夢中になって、健康づくりがうまくいってほしいということです。これは発達段階に関連あることです。つまり、ある時に学習しておかなければ、その年齢を過ぎた時いくら練習してもどうにもならない。ですから、それぞれの年齢に沿ったところで、きちんとスポーツが行われていることが必要であろう、これがだいたい私の話の基本になるわけです。

そこで現在、社会教育の分野では、こうした町民のニーズに応えるために何が問題であるのか。施設の面では、柴田町はいろんなものが揃っておりますが、しかし、そんなにあるわけではない。それで先程、県の課長さんがおっしゃいましたように、学校開放というように施設を開放しておりますが、月1回、利用者の会合を開きまして、使い易いようにみんなで調整をしています。施設を一生懸命造りながら、現にあるものを皆さんに上手に使って頂けるようにしています。けれども残る問題は、施設管理の人材確保です。どうして管理したらいいか大変困るわけです。いまシルバー問題、意欲的に取り組んで下さる方がいらっしゃいますが、本人の問題、それから指導者の問題があります。同好の士が集まって行うグループの場合は割合問題がないわけです。野球をやりたいと言えば、野球をしに来るんですから。ところがそうではなくて、ただ漠然とスポーツをやりたいという人たちに対応するのが大変です。そこで教育委員会としては、〇〇教室というのを作りましてそれを皆様にご紹介してやっております。やっていると楽しくなれば、どんどんやって頂く。そういう時に、私は仙台大学に感謝申し上げる。今日、本当は来たくなかったんですが（会場笑い）、仙台大学には大変義理がございまして、ちびっ子体操教室、これはもう宮城県のどこにもない。あんな小さい子どもたちがよくやっている。本当に大学には感謝しています。学生諸君がサポートしてくれて、ありがとう、こう言いたい。その他、公民館等々の教室開催などでも仙台大

学の学生諸君にもお手伝いして頂いてる。これが柴田町のスポーツ人口を増やしていくのに基盤となれば非常にありがたい。ぜひぜひ今後とも今まで通りご協力を賜りたい。

次に学校教育という分野では、小・中学校とそれぞれの指導によって、スポーツが好きだという児童生徒が増えていることは間違いない。間違いないですけど、夏の暑い日にクーラーのついた部屋でテレビを見てごろっと休んでいる時に、外で汗を流してスポーツをしている子どもの気持ち、これを聞いてみた。私が旧制中学時代に夢中になってスポーツをやったのは何故かと言いますと、何のことはない、私の先輩に憧れていたから、あういう人になってみたい、それだけです。子どもたちに聞いてみますと、伝統を受け継ぐためという者もいます。先輩に悪いから、あるいは先輩がおっかないという者もいます。親との約束があるからとか、いろんな理由があります。しかし、最終的には、槻木中学の駅伝が強いというのは、大久保君がいたからです。槻木中学出身の大久保君があればほどの記録を持ち、未だに槻木中学の記録は破られない。あの久保の記録を破ってやるぞという気持ちが、槻木中学の駅伝の強さです。今年は残念ながら、東北大会に出場できませんでした。そういうふうに、要は子どもたちがそのスポーツに価値を見いだす、この価値を見いだした者はその種目に熱中するようになると思います。その外、サッカーに夢中になった生徒もいますが、学校の授業が終わったあと塩釜まで行って、毎日練習をして、ついに全日本の選手に選ばれました。たいしたもの。こんなことを考える時、私は柴田町にある柴田高校の体育科とか、仙台大学の、うちの孫にいわせれば仙台大学のお兄ちゃん、お姉ちゃんということになりますが、この仙台大学の学生諸君が、子どもたちの素晴らしい憧れの的になってくれる、その憧れの的になるような学生諸君であって欲しいと思います。そうすればきっと柴田町の少年たちが、皆さんに続くような、スポーツをや

ることに意義を感じていくであろう、こういうように思う。ですから私はスポーツをやる時には、やはりいい先輩がいることが最大の条件であると思います。そういう観点からも、町としては、大学と交流しています。

それから海外交流、これまで中国から3回ばかり来てもらっていますが、今度まもなく駅伝のチームを連れて行きます。これには実は秘密があるんです。何をやっても中国には負けます。ただ中国には駅伝がない。そこでルールを教えて、そしたら「やる」という。ところが来てみたら、さすが中国は速いわけです。これはしょうがない。学校の制度が違う。中学生を連れてこいというのに高校生を連れてくる。何故だというと、中学校というのは高等中学、つまり6年制中学なんですね。それに初めから運動の中学校というのもあります。これにはかなうわけがない。この前は中国から少年サッカーが来ました。少年サッカーは柴田町が勝ちました。本当に先程の本間先生ではございませんが、スポーツには言葉はいらない、いっぱつで子どもたちは仲良くなりました。

町ではスポーツに優れた人を表彰したいということで、町民でなくとも、仙台大学の学生さ

んであるが誰であるが、この町内に居を構える方で、規程に沿った成績を取った方には表彰状を差し上げています。また、広報で活躍の状況を町民に知らせることもやっておりますし、あるいは住民がスポーツに憧れていくようなスポーツの政策をやっていきたい。こういうふうに考えております。

そこで今後、町の教育委員会としては、どんなことをしたらいいかということです。実はうちの方には仙台大学の卒業生が随分います。しかし、その者だけが企画したのではだめで、やはり町民のニーズに応えるためには、早く町のスポーツ審議会というのを発足させて、幅広く町民の意見を聞きながらやる必要があります。審議会の意見を聞きながら、施設整備、指導者の確保等々、もちろん大学ともご相談申し上げて、是非いい長期計画を作成したいと思います。柴田町のキャッチフレーズは「大学のある町、柴田町」です。どうか、大学生の諸君は町民の模範となるようにスポーツの成績も挙げて頂きたい。日常の行動もりっぱであってほしい。こういうことをお願いして私の話を終わりにしたいと思います。(拍手)

## 「企業の立場からの生涯スポーツの振興と課題」

提起者（株）エルタス東北第一営業部リビング課長 松 宮 榮 典

ご紹介に預かりました松宮でございます。本日はこうした席にお招き頂きまして、ありがとうございます。できるだけ本音でお話しさせて頂きたいと思います。生涯スポーツというのは、本質的には個々人の問題だと思っておりまして、したがってここに企業という存在が入り込むのは、私個人としてはちょっと抵抗を感じる

わけでございます。しかし、立場上、ここでは企業人の立場からお話していきたいと思っております。

私は現在、東北電力の関係会社でございますエルタス東北というソフトサービスを事業主体とする会社に出向中ですが、東北電力時代も現在も、多少なりともスポーツとか文化

ということと関わりをもった仕事をして参りました関係上、今日は、東北電力が進めております、あるいはこれから進めようとしております事につきまして、4つの切り口から私見を交えてお話させて頂きたいと思っております。

まず第一は企業にとっての生涯スポーツの必要と意義についてです。企業はいま激烈な競争社会のなかに生きております。この競争に生き抜くために、各企業もそれぞれの部門にコンピュータが導入される、あるいは基準化とか規格化、分業化といったことが浸透してきています。この企業の合理性追求という波は、今後、国際化の拡がり、価値の多様化、高齢化、情報化、こういった波の中で一層強まってくるのではないかと私は思っております。こういう背景の中で、企業が求めている労働の質というものも大きく変わってきているのではないかと思います。従来の単純な労働力といったものから、ひらめきのある、創造性のある、新鮮な頭脳と思考を企業は強く求めておまして、こういった傾向は社会の成熟化と高度化に伴いまして一層強まってくるのではないかと思っております。

いっぽう働く人たちの意識はどう変わってきたかと言いますと、すでに貧しい時代は過去のものになりまして、特に若い皆さん方中心に、ゆとりだとか、自由とか、いわゆる個々の心の豊かさといったものを強く求めてきていることは統計等でも明らかであります。私たちの年代のサラリーマンが理想としておりましたこの労働観というものが、いま着実に現実のものとなりつつありまして、私個人としても大変うれしく思っております。私は先程、企業は豊かな感性をもった人材を強く求めていると申し上げましたが、こういうひらめきのある豊かな感性というのはどういう職場環境、あるいはライフスタイルの中から生まれてくるんでありましょうか。私はいつも思うんでありますけれども、いわゆる働け、働けといったことをモットーにしている、余裕のない職場環境からは決して生まれてこないと思っております。先程からあ

りましたけれど、今この社会は労働時間の短縮といったことが大きな課題になっておりますけれども、私はこのゆとりのある、めりはりのあるライフスタイルというものからこそ、創造的でひらめきのある、感性豊かな思考、頭脳というものが生まれてくると思っております。今、そこでサラリーマンにはどういものが求められているかと言いますと、仕事そのものの資質だとか、意欲というものに加えて、高い識見や人格といったものが強く求められていると思います。文化・スポーツ活動、地域活動、ボランティアなど、仕事以外の部分でいかに深く多く接触媒体を持っているかということが問われている時代になってきていると思っております。私はサラリーマンが仕事以外の活動を通して、自分の内部に新しい価値を持つということが、結果的に企業に新しい価値を提供するものだと思っております。

これは私個人の考え方ではなくて、先進的な企業の多くはそういうふうを考え始めていると思っております。この仕事プラス・アルファというものを何に求めるかということにつきましては、これは個人の問題でございすけれども、スポーツというものが、効果的な一つの大事なものであるということは間違いのないわけです。企業はいま働く人たちの「ゆとり指向」といった価値観を大きな寛容の精神で受け入れまして、むしろそういう労働観といったものを支援し育成していこうとさえ思うようになってきているわけでございます。

さて、このスポーツは爽やかな汗を流すという意味でたいへん素晴らしいものだと言われておりますけれども、職場という関連からみてみますと、企業というのは人と人から構成されておりますから、皆さんが考えているよりもっとドロドロした人間関係が職場の中に内在しています。スポーツをやるということは、企業に新しい風を吹き込むという意味で、私は非常に魅力があるものと受け止めております。爽やかな汗と同時に人間関係を非常に円滑にするというこ

とで、企業がスポーツを薦めようとしているわけでございます。

さて、いま東北電力は「企業市民たれ」ということを強く言っております。この企業市民というのは皆さんも承知のように、一口にいえば企業人としても市民でなければならないけれども、家庭人としても、あるいは一市民としても、素晴らしい人間でなければならないということを求めているわけでございます。従業員一人ひとりが仕事以外に、文化だとかスポーツだとかボランティアだとか、そういった媒体を通じて地域とのコミュニケーションを図る。そのことが企業体には見えない新鮮な情報をまた企業の方へ持ち帰ってくる。また、会社が進めている本当のハートというものを、そういったことを通して地域の方々にご理解を頂くという狙いでございます。

企業はこういったいろいろな期待を込めて、積極的に従業員の文化とかスポーツとかボランティア、地域活動を進めようとしているわけでございます。今後、こういう考え方は広くいろいろな企業に浸透してくると私は思います。こういったことが私の企業人としてのスポーツの意義でございます。

次に今、東北電力が進めているスポーツ振興策、あるいは健康づくりのための施策について一例をお話したいと思います。まず労務管理と関連する施策でございますけれども、何といたしましてもスポーツ施設の整備ということがございます。東北電力では新潟を含めて東北7県に事業所をもっているものですから、事業所が150もということで、これはなかなか頭の痛い問題でございます。従業員の皆さんは近くに施設が欲しいという強い要望があるわけですが、現実的には非常に難しい問題であると思っております。これに関しては、私の個人的な考えを後ほど述べさせて頂きたいと思っております。

次にスポーツや文化サークルを積極的に形成し支援していこうと考えております。スポーツでは、野球やサッカー、ラグビー、陸上、剣道、

柔道、そういった幅広いジャンルに経済的な援助をしようということを展開しています。

また、3つめと致しましては、10月の1カ月間、全社を挙げての「健康増進月間」というふうに決めました。健康づくりの講習会、あるいは体力測定というものを、1万3千名全員が参加するというで展開しているものでございます。特に体力測定の結果というものを有効に活かそうということで、その方策として、栄養士、あるいはスポーツ・トレーナーといった方々の力も借りまして、マンツーマンの取り組みをしております。そういったことを通して、従業員が日常生活の中にスポーツや運動を定着させていく、これが狙いでございます。

それから、もう一つご紹介したいと思います。スポーツ愛好者の底辺を拡大しようということで、約10種目のスポーツ活動を、職場対抗で毎日実施しているということでございます。一方、健康保険組合というものがございまして、ここでもいろいろな施策があるわけでございますが、その主なものといたしまして、保養施設を各地に経営していこう、あるいは健康づくりのための新しい情報を家庭まで届けようというふうな、いわゆるモチベーション対策を行っております。保養施設は、従来、体を休めるという機能だけだったわけでございますが、最近では、いわゆるリゾート感覚をもってと言いますか、スポーツ機能を有した施設を作らなければならないということで、今そっちに大きく方向性が変わろうとしております。

それから若干、勝手なことになりますが、企業イメージの向上、あるいは従業員の私生活を高めよう、もう少し大きく言えば、東北地方の活性化を促進しようということで、諸施策を講じております。その一つをご紹介し申し上げますと、東北電力はいま特別強化チームというものをもっております。これはサッカーとラグビー、女子バスケット、バドミントンで、新潟県と秋田、宮城にもっており、選手が約160名でございます。東北出身の優秀な人材を招きま

して、そして一流のコーチ陣のもとに全国レベルのチームを形成していこうということで取り組んでおります。4年目のチームでございます。その成果はまだございませんが、どうかご支援を頂きたいと思っております。こうした特別強化チームというものと、今日のテーマの生涯スポーツとは直接的には関係ございませんが、しかしこういった活動がスポーツ文化の底辺を広げるとい意味では大きな役割を果たしているのではないかと考えております。こういうチームを社内に抱えることによって、従業員の解放感といいますか、意識改革にも貢献するというところで、私は無視できないと考えております。

最後に企業のサイドから生涯スポーツ振興のための提案を、問題提起を含めまして、3つにまとめておきましたので申し上げたいと思っております。まず一つはスポーツ指導者の資質の問題です。今日はたくさんの学生さんにお聞き頂いておりますが、このスポーツ指導者が技術的な指導能力を有するというのは当然のことでございますが、しかしながら、生涯スポーツというのは人生そのものに関わるものに近いようであります。したがって人の人生観をも変えていく、導いていくだけの魅力がなければ、私はスポーツ指導者にはこれからはなれないのではないかと考えています。私もエルタス東北も、先ほど理事長さんからお話しがございましたように、近い将来、この生涯スポーツを事業化しようというふうに内々検討しております。そういった時の人材の確保という面では、やはり技術力プラス、いかに人間的魅力があるかということを考えて採用していきたいと考えております。これから社会に旅立ってゆく皆さん方には、ぜひ技術力の向上に併せて人間的な資質を培って頂ければと、このように思っております。

次にスポーツのための時間の確保の問題でございます。これも先ほど本間先生からいろいろお話しがございましたけれども、私は正直申し上げまして、サラリーマンが1日の中でスポーツに充てる時間を割くというのは非常に困難だ

と、ごく一部の方々を除いて困難だというふうに思っております。したがって、最近読んだ本でありますけれども、大前研一さん、世界的な経済学者であります、この方が提唱しております「時間というものは1日単位ではなくて、1週間とか15日とか1カ月とか、あるいは3カ月とか、こういう少し大きなスパンで捉えまして、その中で自分のやりたい時間を優先的に確保してしまう。」こういう考え方を生活の中に組み入れていかなない限り、私はこの生涯スポーツというものも夢のまた夢になってしまうというふうに思っております。お読みになった方もおられると思いますが、大前研一さんは『生活者革命』という著書の中で、自分の時間の考え方というものを4つに分けて考えておられます。一つは企業人としての時間です。社会的人間としての時間です。それから家庭人として充てなければならぬ時間です。それから自分自身のためだけに使う時間という区分けをしまして、そして先程申し上げましたように、長いスパンでそれを優先的にとってそれをもう守り抜いていく、何があってもそれは渡せない、そういう哲学をもって自分は生きているんだということを本に書いておられました。ご紹介させて頂きました。

次に最後の提案であります、体育施設に関する問題です。これは申し上げておりますように、一企業がスポーツ施設を持つというのは余程のところでなければ不可能だと思っております。したがって、私は各企業は自分のところでスポーツ施設を持つという夢を別なかたちで実現していかなければならないのではと考えております。具体的には、先程からお話しにございましたように、スポーツクラブ、あるいは公共的スポーツ施設というものを利用する場合、体育館を造るぐらいの気持ちで、思い切って従業員に経済的な援助をしてやる、助成してやるといったことを具体的な例としてご提案申し上げます。

最後に一つだけお話しさせて頂きます。詳し



いことはわかりませんが、十数億の人口をもつ中国に大極拳というのがございます。あれは体育施設に頼らない、私は非常に見本とすべき素晴らしい生涯スポーツじゃないかと思っています。忙しい日本人に合うスポーツ文化は何なのか、あるいは体育施設なんかに頼らなくてもできるスポーツとは何なのか、そしてそのことをやっているのが非常にトレンドだと映るようなスポーツを、ぜひ本間先生たちにお考え頂きたいと思っています。

企業の活性化でございますが、これは私の非常に個人的な見解でございますが、芸術家とかマスコミ、あるいは社会的影響の強い方の力を

借りる必要があるんじゃないかなと思っております。つまり新しい旋風を起こすわけでございますので、要するにわれわれみたいなものの考え方ではなくて、やはりフィーリングに訴えてゆくというのが非常に大事だと思います。唐突なことではございますけれども、いま宮沢りえさんとか、貴花田関とか、こういった方々の力も借りて、新しい生涯スポーツというものを形成していったらどうかと夢を持っているわけでございます。たいへん雑駁な話でございましたけれども、これで終わりたいと思います。

(拍手)

## 「東北リコーにおける生涯スポーツの現状と今後の方針」

提起者 東北リコー（株）経営管理本部総務部長 長 島 治 夫

私、地元東北リコーの長島でございます。25周年ということで、本当におめでとうございます。私ども東北リコーも今年でちょうど25周年となりました。私ども東北リコーにおきましては、今日のテーマであります生涯スポーツという視点に立った活動を行っているわけではございません。今日は、私ども東北リコーには1560名近くおりますが、この人たちの健康づくりのための体力の維持と向上を目的にした活動について、現状と課題ということでお話しをさせて頂きたいと思います。

まず現状のほうですが、健康づくりのための体力維持と向上を、2つに分けて考えてみたいと思います。一つは体の状態を測定するということが健康診断であるとか、あるいは体力測定など、健康測定ということがございます。もう一つは体力の維持、向上のために体を動かす、これはスポーツなどをする。これらについ

てちょっとお話しさせて頂きたいと思います。

まず健康測定であります。これは大きく2つあると思います。一つは、1988年からやっております全社員を対象とした健康診断や健康相談です。私ども1000人以上の企業になりますと、産業医を常駐させなければならず、産業医の先生が常勤というかたちでおり、健康相談などにおきまして非常に大きな効果を生んだということです。それから2つめに、仙台大学の佐藤先生をはじめ他の先生方のご指導のもとに中高年層、40歳以上を対象とした、各個人の体力測定と、その後の運動指導などを1985年から実施しております。これをわれわれは「中高年の健康づくりセミナー」と言っております。これについて話をさせて頂きます。

セミナーの結果ですが、現在157名の方が参加されています。年に1回あたり、20名から30名くらいの方に参加して頂いております。これ

を受けてどのように変わったのかと見てみますと、行動が変わって、ジョギングをしたり、あるいは自転車通勤をしたり、毎日歩いたり、縄跳びしたり、そういったことをするようになった方というのが73人、約46パーセントいらっしゃる。その他、54パーセントの方は意識は変わったんですけども、実際に具体的に行動を起こしていないということなんです。こういう人はなぜ行動に移せないのか、いろいろ確認しましたところ、やはり健康診断を受けて異常がない人は、私の体は別に健康なんだからそういうことは必要ないんだ、という意識をもっていらっしゃる方が非常に多い。あとは面倒臭いとか、そういうことがあるんでしょうけれども、54パーセントの方が意識は必要だというふうに変ったんですが実際にやっていないということです。

運動を始められると、2回目のデータを採ったりいろいろしますと、やはりきちんと効果が出ている。これは間違いなく非常に効果があるんだということです。ただ、反面、一人の方が新しいことをやりましたら、たまたま心臓のほうが悪くて、かえってマイナスになったということではございました。あわてて別の運動の方法を指導しました。やはり基本的には個人個人に合った指導の仕方をしていかないとけないということです。

それから次に、体を動かすという方ではどうしているかと言いますと、サークル活動も非常に積極的で、体育系のクラブですとバレー部、サッカー部、野球部等々、だいたい13クラブくらいあります。それに390名の人が、これは総従業員約25パーセント、約4分の1に相当する方が参加してやっております。会社からも補助金を出すなどのクラブに対する支援をしておりますが、いろいろ見てみますと、何年間かずっと県下でトップクラスにあるクラブなど、たとえば男子のバレー部などはそうなのでございますけれども、やはり会社からの支援ということだけでなく、OBだとか社員の

バックアップが大切であると思います。バレー部ではOB会が組織されておまして、そのような体制ができておりますと、たとえば、人材の確保にOBが動いてくれるなど、強力なバックアップ体制があります。

それから先程来、いろいろお話しがありましたが、レクリエーション活動というものも私どもでもたいへん盛んであります。年々、参加率が増え、非常に活発化してきております。活動状況は、ソフトボール、バレーボール、バドミントン、こういったものを1年間企画しているわけですが、90年度ですと1786名くらい。これが91年度には2807名くらい、約57パーセントのアップ率です。92年度はさらにそれがもっとアップする見込みで、さらに30パーセントのアップ、これは延べで言っておりますので3500名近くの参加者があるのではないかと期待しております。

こういうレク活動ということを通しての感想ですが、いくつかあります。今回、いろいろ見ていて中高年齢者の参加率というのが少し低いようなんですね。やはり、一緒にやったりするのがうまくないのかなと思います。ただ中年の方、40代の方は結構参加するんですが、50代の方は難しいようなんですね。やはり、そういう人たちに合うようなやり方と申しますか、そういったものを考えなければならないんじゃないかと思います。それから若い人たちはどうなのかと言いますと、若い人たちというのは、いろんな機会を与えて、それと同時に働きかけをちょっとしますと、皆さん出て頂けるような状態になっております。

それから3番めに、レク活動というのは、やはり競うということではなくて、楽しさを求めるケースというのが非常に多いと思います。たとえば職場の仲間が手弁当を作って参加するわけですね。そして応援をしたり、食事の時にみんなグループを作っているいろいろな楽しんでいる。そういう楽しみもあるんですね。昔は土曜日だとか休日の時にやりますと、ほとんどの人

が参加しないんですね。かつては130名くらいでしたが、今年は、応援者を入れないで、参加者の数が約450名くらい、応援者を入れますと800人くらいになりました。こういうふうにある程度レク活動というものがいろいろと活発化してきた理由の一つとして、私どもにはレク委員会というものがありますが、この組織体制でいろいろな強化をしてきたことが大きかったんじゃないかなと思っています。各部門から委員を出して頂いて、その委員会を主体にして活動を行うというやり方をしております。

私どものこれからの課題と今後の方向ということで、ちょっと考えていることをいくつかお話ししたいと思います。これは先程からいろいろ話が出ております、世の中の大きな動向のひとつであります「労働時間の短縮」ということです。これは政府のほうでも、先ほど本間先生からお話しがありましたように、新規経済5カ年計画の中に盛り込まれておりまして、年間の総労働時間を1800時間にしていこうということが政策として掲げられています。当社は、休日が122日あります。年間の総労働時間ですが、昨年度の実績で1999時間で、やっと2000時間を切るようになりました。全国平均が2016時間ですので、全国平均レベルよりも若干下回ってきたというところでございます。われわれとしましては、これをさらに促進しようということでやっております。そうしますと社員一人ひとりの余暇というものがどんどん増えてくる。その余暇をどのように活用していくかということが、われわれにとって非常に重要なことであります。そこで企業としての、余暇活動を充実させるための施策の検討ということがあります。そのための施策の一つに、このテーマでもあります、幅広い年齢層にわたってのスポーツ活動を日常的に親しんでいけるようなことが大切だと思います。具体的には従来からのサークル活動、レクリエーション活動をさらに充実させていきたいと思っています。今までとちょっと違った、いろんな志向、やり方といったものを

考えていきたいと思っています。そして、とくにレジャー関係、レクリエーション活動に人気が出てきておりますので、これに対応したレクリエーションの充実化ということを考えております。

それから、何と言いましても企業においては、やはり心と体の健康づくり、これはTHPという、「Total Health Promotion」という言い方をしておりますが、この推進ということをおわれわれとしても充実させていこうと考えております。その一部ということになりますが、先程の体の健康づくり、誰でも必要だと言っておるんですけれども、実際にはなかなか実行していないのが現実ではないかと思っています。特に中高年になってきますと、自分自身の健康について、最初は自分の体力というものがどの程度か判っていなかったり、またどんどん低下していることを自覚していなかったりします。また体力がどの程度か判ったとしても、先程お話ししましたように、面倒なのか、さほど必要と感じていないのか、実行していない人が多い。これらの人たちをいかに実行させていくかということが大切なんです、そのために私どもはどうしているかということ、2つの視点からちょっとお話ししたいと思います。先程からお話ししてまいりましたように、やはり個々の健康状態というものを測定してどの程度の運動をしていくべきかということの検査、そして個人にあった運動を実行させ、その効果の確認というサイクル、「健康管理システム」というものを確立させていきたいと思っています。

次に体を動かす、スポーツをするということですが、健康測定の結果に基づきまして運動プログラムを作成し、指導する、そういった知識を持った人を確保して、一人ひとりに合った運動の指導をしてほしいと思います。仙台大学の学生さんが非常に多いんですが、われわれとしてはどういうことを望んでいるかということ、体育クラブを指導していけるようなことも一つです、スポーツ振興のための、いろんな

企画ができる指導者、そして最後にヘルス 트레이ナー、こういったこともやれるような指導者が、私どもにとっては重要であると思っています。

最後に、私事で恐縮でございますけれども、私は非常に運動神経がにぶくて、そういう立場から一つだけお願いをしておきたいと思っています。スポーツとはやっていて楽しくて、見ててもいいなと思う。そして気晴らしになる、仲間もできる。私自身は、先ほど本間先生の話しの中にも出てきました運動をしない6割の中に入るんじゃないかと思っていますが、やはりそういう人でも、根気よく指導して頂ければと思うんですね。私も皆さんと一緒にやりたいという気持ちもあるわけです。何でも段階的な指導の

仕方とかがあると思います。個別に指導してくれる、これは費用がある程度かかっても仕方がないんですけども、そうして頂ければありがたいと思います。そして私もぜひ「私のスポーツ」というものを持ってみたいというふうに思っているわけです。そういう意味で、ご指導して頂ける方がいらっしゃいましたら、お願いしたいと思ったわけです。先ほどからお話しがございましたが、いつでも、どこでもというのは下地ができている人のことではないかというふうに思っています。私のような者でも、いつでも、どこでも、やるようにしてもらおうと非常にありがたいと思います。取り留めもない話をさせて頂きました。どうもありがとうございました。(拍手)

## 「生涯スポーツ——ある中高年齢者の実践例」

提起者 仙台大学教授 佐 藤 佑

我国の平均寿命は男子が76歳、女子が82歳で世界一の長寿国になりました。そして65歳以上の高齢者は、全人口の13パーセントを占めています。先程、本間先生がお示ししたスライドによりますと、近いうち4人に1人が65歳以上という、世界でも稀な超高齢化社会へと進行しつつあります。しかし、寝たきりでの長生きは本人はもとより、家族の負担も大きいわけですし、自分の身の回りは自分ででき、その上、生活の質を高めて、健やかに美しく老いて人生を全うすることがすべての人びとの最も大きな願いでもあります。この健やかに美しく老いるためには体を動かすことが大切です。生涯スポーツは高齢者にとって健やかに美しく老いるための必要条件であると考えます。そこで私は、中高年齢者の規則的な運動が身体に及ぼす効果につい

て、若干の資料をお見せして、話題を提供したいと思います。

(スライドを見ながら) 皆さん、この方は現在75歳の村上さんという、隣町の大河原にお住まいのレストランを経営されていた方でございます。現在、毎日、大学のグラウンドに来て、20周一輪車を乗っておりますが、この方が一輪車を乗り始めたのは67歳の時でした。大変苦勞されてこの一輪車をマスター致しました。しかし、この方は50歳代には大変体に不調がございまして、しかも病気に悩まされたそうです。病院に行っただんですが、医者から見放されまして、それでは自分の体は自分で手入れをしなくてはならないということで、50歳を過ぎてからジョギングを始めました。59歳の時、かなり走り込んでいる時に体力テストをさせて頂いたんです

が、(スライドを見ながら)これは、強い運動をどれだけ長くできるかというスタミナのテストでございますが、最大酸素摂取量を測らせて頂きました。59歳の時の最大酸素摂取量は体重当たり48ミリリットルで、まさに20代の一般の方と同じ値でございました。それ以来、ずっと継続的に測定させて頂いたわけですが、現在75歳で40ml、これは40歳代の体力でございます。

この方が中心になりまして、1978年に、「おはようジョギング・クラブ」というものを作りました。メンバーですが、朝6時に集まりまして、非常に軽い歩行それからランニングを、約30分から50分、1週間に3回、2年間続けました。最初の内はだいたいいたんですが、2年間、最終的にやり通した方は、30代、40代、50代、60代それぞれ2名ずつ男性が8名です。女性の方は30代、40代の方が2名ずつ、50代の方が1名の合計5人です。13名の方が曲がりなりにも2年間続けられました。そして、ジョギングをする前と2年後の値をいろいろと検査致しました。その結果をご紹介します。(スライドを見ながら)これは66歳の人の、12分間の自転車こぎ、これは軽い運動ですが、ジョギング前には、心拍数の動きを見れば分かるように、非常にギザギザしていて、しかもジョギング前には120拍くらいに心拍数が上がっています。ところが規則正しい運動をしますと、心拍数の上がりぐあいは低く押さえられて、しかも運動にスムーズに適応していることがお判りになると思います。約10拍くらい少なくなっており、回復も非常に速やかです。また血圧ですが、この方は本態性高血圧で、安静時の血圧がジョギング前には180mm Hg くらい、このような非常に心拍数が低い120拍くらいの運動でも血圧がなんと240mm Hg 近くに上がりました。ところが2年後は、安静時の血圧が10mm Hg ぐらい下がりましたね。何よりも運動時の血圧があまり上がらない。

これは56歳の主婦の方です。先程と同じような12分間の自転車こぎなんですが、ジョギングの前には140拍以上に上がりました。しかも先

程の方と同様ジグザク。ところが2年後は20拍ぐらい下がりました、しかも非常にスムーズに運動に適応していることがおわかりだろうと思います。同じように安静時の血圧が150mm Hg 近くありまして、運動しますと220mm Hg ぐらいになります。ところが2年後は安静時の血圧も下がるし、運動時の血圧もかなり下がっています。

これは全員の心拍数の平均ですが、トレーニング前はこういうふうに心拍数も変動していますが、2年間、規則正しい運動をいたしますと、安静時の脈も下がるし、運動中の脈も10拍から15拍くらい下がり、しかも回復も非常に速やかで、心臓が極めて機能的になったといえます。これは血圧ですが、トレーニング前は170mm Hg 近く上がりましたが、運動中、10から15・6mm Hg くらいしか、あまり上がらなくなりました。こういうふうな運動をしてみても、また止めますと、下がった血圧がまた上がります。ですから運動は継続しないと、少なくとも心臓とか血圧の機能には効果が出ないということが私どもの結果からおわかりだろうと思います。

先程、松宮さんのお話しにもありましたが、別に打ち合せをしたわけではございませんが、これは1979年に私立大学の訪中団に参加させて頂きまして、上海の公園の朝の風景です。朝、三々五々みなさんが来られて大極拳をしています。これは北京での風景です。これも7時前ですが、みなさんがこゝろ集まってきて大極拳をしておりました。北京の体育学院で聞いた話ですが、大極拳をしている人とそうでない人では平均寿命が7歳違うそうです。今年の夏に13年ぶりに北京に行った時なんですが、やはり朝、陽の上がる前から、近くの公園で、みなさん散歩をしたり大極拳やら自己流の運動をしているんですね。ただ、13年前よりもちょっと太めの人が多くなったかなと感じました。これは朝の5時半くらいにフラッシュをたいて撮った写真なんですけれども、この方は78歳です。それくらい非常にお年をめされた方なんですが、ご覧の

ように、柔軟性といい、しかも何よりも生き生きとしているということです。(スライド、ありがとうございました)

村上さんをはじめとして、運動を実践している高齢者はみるからに生きがいをもって、ハリのある生活をしているように思われます。そこで大切なことは運動を習慣づける時期であります。体力の低下を感じ始める、40歳から50歳ころ始めますと、一番長続きできそうです。そして誰もが、どこでもできる運動は、歩行やジョギングです。このあたりは都会と違いまして、

玄関を一步出れば四季折々の自然に触れることができます。また気分も爽快になります。

私はよく言うんですが、「寝ている人は立ちなさい、立てる人は歩きなさい、歩ける人は軽く走りなさい。」これがすべての運動の基本であると思います。丈夫で長生きするためには運動の習慣をもつことが大切であります。だれもが、いつでも、どこでも、いつまでもできる運動は歩行であることを強調して、私の話しを終わりにしたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

## 「生涯スポーツについての考え方」

提起者 宮城教育大学教授 近 藤 義 忠

宮城教育大学の近藤とご紹介頂きましたけれども、仙台大学の…と自己紹介できたかもしれない近藤でございます。と申しますのは、ちょうど大学院の全課程を修了した時点で、仙台大学からもお誘いを頂きました。ただ一足先に発足した宮教大に職を得まして、それ以来、宮城教育大学の近藤ということになってしまいました。ただ、仙台大学には大変大きな思い出がございます。昭和42年の開学当初から、私は生涯スポーツ関係の講義を非常勤という形で担当させて頂きました。以来、10年あまりになりました。ようか、新進気鋭の丸山先生がおいでになるまで、この大学で専ら生涯スポーツ関係の講義をしたのは私でございます。国立大学からはわずかな給料しか頂けなかった時代に、仙台大学からは専任の先生に優先して手厚いお手当をいただきました(会場笑い)。

さて、本日お話ししようとしたことは、いろいろと考えてまいりましたが、先程来、本間先生をはじめ先生方のお話を伺いますと、もはや

私の話すべき事は何にもない。むしろ、この際若干遅れております進行にご協力したい方がいないんじゃないか(会場笑い)と、内心そう思っておりますが、せっかくの機会ですので一言、二言、話をしたいと思います。

先程私は、仙台大学では昭和42年から、生涯スポーツ関係の講義を担当したと申しました。体育・スポーツ社会学、あるいはレジャー論というような講義ですが、私の今日に至る過程の中でとても大事な時期でございました。と申しますのは、私の勤務いたしました教員養成大学では、当時、私が専門にしておりました生涯スポーツであるとか、あるいはレジャーであるとか、あるいはスポーツの社会学というような科目は必要なかったわけです。ところが仙台大学は東北・北海道唯一の体育大学で、しかも時代の最先端をゆくカリキュラムを当時から作っていらっしゃるしまして、私も本気になって専門の講義をさせて頂いてたわけです。それが思い出になり、私にとっては、この大学で講義できた

ことが今日の私を育ててきた大きな肥やしになったのではないかと考えております。教員養成大学で、生涯学習や生涯スポーツということが問題にされ始めたのはごく最近、1980年代以降ということになります。とくに、一昨年改定されました教育職員免許法、新教免法といっておりますが、そこには体育教師になるための必要条件の中に、生涯スポーツ関係の科目がきちんと履修されていることとなっています。時代の流れとはそのようなもので、学校体育の教師になろうとする者であっても、もはや生涯スポーツに関する見識をもつことは必要不可欠になっている、そのような時代になってきたと思います。以上は自己紹介を兼ねて、申し上げたわけでございます

私の世代の者が生涯スポーツの問題に関心をもつということは大変に困難でした。しかしながら、若い頃から仙台市をはじめ宮城県からもいろいろな審議会の委員等を委嘱されて勉強させて頂きました。ある時、仙台市の今日の健康都市に関する審議会の会議がありまして、広瀬川の河川敷を開発して、運動公園、総合公園を造るということになり、意見を申し上げる機会がありました。都市の運動公園とか総合公園についての私なりのイメージもありましたので、理想的なあり方についてお話し申し上げたんですけれども、その話のさなか、あまりにも理想的すぎる、私の言うようなトイレや水飲み場などは河川敷につくる公園には設置できないんだということになりました。建築の制度、特に建設省関係の非常に厳しい河川敷上の法制度があり、たとえば河川敷には高さ1m以上の固定した建造物が作れないことになっております。しかしこれからの時代、とくに子どもがスポーツをする場所として、少なくともトイレや水飲み場は必要だろうと申し上げたのですが、「いや、そういうことを我慢できるのがスポーツ少年である。スポーツをやる子供たちは、少しぐらいションベンがしたくとも、水が飲みたくても、我慢できなくてはだめだよ」(会場笑い)、

そう言って建設局関係のお偉いさんは私の話をまぜかえしました。確かに、その時代まで、今から25年ぐらい前ですが、スポーツマンというのはこのように我慢できる、我慢ができなければスポーツマンとはいえなかったわけです。しかし我慢ができる人というのは限られている。生涯スポーツという考え方は、スポーツは決して我慢することではないんですね。スポーツはもっと楽しいことであって、自分のしたいことを楽しむ、あるいはスポーツのもっている心豊かな喜びをまるごと、まさに人生の醍醐味と言っていいかと思いますが、それをまるごと受け入れるのがスポーツであろうと思います。今ではこういうふうに考えても何の不思議もないんですが、生涯スポーツというのはそういうことをこれから本気になって実現していこうということだろうと思います。

次にエピソードの2でございます。これも仙台大学に参っておりました頃の話、昭和40年代初め頃の話なんです。東北大学に、アメリカから体育を研究している偉い先生がお訪ねになり、その先生を半日、ご案内することになりました。宮城県のスポーツ施設をご覧になりたいということで、その当時は、今ほどたくさんございませんでしたが、めばしいところとして、レジャーにはほとんど使えない仙台市のレジャーセンター(会場笑い)とか、代表的な学校の運動施設だとかを、ひとまわりご案内して、最後に、当時は時代の最先端をいっていた宮城県のスポーツセンターへご案内し、ここが最後だと申し上げました。午後の2時頃だったと思います。そこで先生は「お礼に一杯御馳走するからバーに行こう」とおっしゃるんですね。「待って下さい。まだ陽は高いし、バーに行くには早すぎる」と言いますと、「よそへ行こうというのではなく、このスポーツセンターの中のバーに行こう」ということなんですね。「スポーツセンターにバーなんかはありません」と言うと、その先生、「まさか!」という顔をされたんです。「スポーツセンターにバーがない?ど

うしてそれでスポーツセンターといえるんだ。」スポーツセンターというのは、先生のおっしゃるには「まさに人生の醍醐味をまるごと味わうためのもの」なんですね。運動をして、気持ちいい汗をかく、汗を流すためにシャワーがあり、あるいは場合によってはサウナがある。その次には一杯ですね。ビールでも飲みたくなるのが人情、それが人生の醍醐味というものです。スポーツセンターというのは、そういったものが全部、まるごと揃っていなければならないのです。そうでないならばスポーツセンターではなくまさにジム、あるいは道場なんですね。しかし、これはやはり仙台大学が始まった今から25年前の頃の一般的な考え方だったんです。

ところが何と、その後次々にできる新しい体育・スポーツの施設、とくに生涯スポーツのセンターというのは、もちろんシャワーやサウナはある、あるいは綺麗なラウンジもある、そのあたりのレストランやバーよりもはるかに安い料金でビールも飲める、食事もできる、という具合になってきている。ということはスポーツそのものに対する考え方が基本的に変わってきているということです。これからの時代、やはりもう一つ大きく発想を変えて、視野を開いて、スポーツの原点に戻っての考え方が大事だと思います。スポーツというのはあくまでも体を使った自己主張、自己表現、自分の心を解放するための文化です。体育・スポーツを専攻する

学生諸君もより大きく目を開いて頂き、社会での役割等について考えて頂きたいと思います。

最後にエピソードの3番めです。仙台大学で生涯スポーツ関係の講義をしておりました時に、学生諸君から「でわのかみ」というあだ名を頂戴致しました。ヨーロッパのスポーツについて、「イギリスではこうだ」「フランスではこうだ」「ドイツではこうだ」とばかり話していたようです。けっして知識をひけらかすわけではないんですが、その時代が体育・スポーツ、特に生涯スポーツ関係の情報というのはほとんどが欧米先進諸国から受け入れてきました。それを何とか自分の眼でたしかめたいということで、1975年、昭和50年に1年間やっと在外研究という機会を頂きましてイギリスに行ってきました。イギリスに行きまして、たくさんの経験をしたんですが、その中で一つ申し上げたいのはスポーツマンというのはいったいどういう人をイメージするのかということです。イギリスではスポーツマンというのは、自分の生き方に責任が持てる人のことで、単なる運動選手のことだけではないのです。自分の意見をしっかり持って、敢然と行動する人こそ真のスポーツマンなのです。それだけにスポーツマンは人から、社会から信頼されて尊敬もされるのです。どうか皆さんも心して真のスポーツマンになって下さい。ご精進を祈ります。 (拍手)



## 【質疑応答】

(質問) 文部省では、生涯スポーツの振興のために何が最も大切であると考えているか。

生涯スポーツ振興のために学習指導要領の改正を行ったが、実際には、学力重視の受験体制がまだ残っていることもあり、生涯スポーツへ傾く状態ではないと考える。本気で振興を行うには、もっと大胆な教育改革が必要ではないか。

(本問) 1. 学習指導要領では、生涯を通じてスポーツに親しむ基礎を培うことを体育の目標に掲げている。

2. 学力重視の受験体制は、企業の雇用慣行等の原因もあるが、根本は、人の評価の基準、人生で何を重視するか、の基準（平たく言えば人生観、価値観）が「他人」にあり、自らの内にあることが原因と思う。制度をいくら変えても、人の心の有り様が今のように「社会」、「世間の眼」、「隣近所」を尺度に動くようでは問題は解決されない。

3. 生涯スポーツの振興には、ハード、ソフト、それらをつなぐシステムの3者の開発・整備が必要。

(質問) 副題にあるように、生涯スポーツに関する施策を実行していく上で、産・官・学の連携は必要と思われるが、その望ましい姿とはどういったものか。既にモデルとなるような事業があれば、それを紹介して頂きたい。

(本問) 1. スポーツ分野における企業の社会的貢献事業（いわゆるスポーツメセナ）の推進

(1) スポーツ振興基金への資金的貢献（'92.6 末までに54社、44.5億円）

(2) 企業によるスポーツ支援財団の設立

e.g. ヤマハ発動機「日本マリンスポーツ普及教育振興財団」  
（'92.7）

2. 産・学連携による研究プロジェクトの推進

(1) 「スポーツ産業学会」の設立(文部省、通産省がバックアップ)

(2) 「スキー学会」、「ゴルフ学会」の設立

(3) 筑波大学「日本リゾートクラブ協会、スポーツ産業寄付講座」の設置

(質問) 本当にイギリスやドイツが生涯スポーツ先進国と言えるであろうか。中国（上海）では「生涯スポーツ」という言葉が実に陳腐に思えるほど、生活の一部として思い思いに運動をし、定着しているようであった。欧米追従型ではなく、いまこそアジアという視点から日本の「生涯スポーツ」を考えるべきと思うがいかがか。

(本問) 1. 英・独は次の基準により「生涯スポーツ」先進国と言えると思う。

(1) 国民のスポーツ実施率、クラブ加入率

(2) 地域に根ざしたスポーツ・クラブの普及（特に独）

(3) 屋内・屋外スポーツ、野外活動施設のバランスのとれた整備状況

(4) スポーツ団体に対する支援（行財政措置、税制）

(5) 生涯スポーツ振興施策の戦略としての確立度

2. 中国については、'91.4 月のソウルの「トリムフィットネス生涯スポーツ・アジア会議」で聞いた中国行政担当者のレポートしか知らないが、「目的に応じ、やりたいスポーツを、やりたい時に」という生涯スポーツの理想が十全に実現されてい

るという印象は受けなかった。

（質問）宮崎先生あるいは県では、国体というものをどのようにお考えか。

（宮崎）県の行政組織は、社会体育班という中で、生涯スポーツも競技スポーツも考えている。これはスポーツ行政としては非常に遅れており、いわゆる選手を強化する、選手を育成する立場と、いわゆる生涯スポーツを考える立場というのは基本的に違っていると私は思う。私はその課長をやっているから、競技力の向上を考える時と、生涯スポーツについて話をする時とは、全く別な視角でしゃべらなければならない。

宮城県では平成13年、第55回国体開催に向けて組織をしているが、従来からの開催県優勝を目指している。しかし、宮城県が目指す国体は、従来の国体開催県がやってきた流れとは少し違った考え方を取り入れなければならないと思っている。これまでは地元の選手で地元の国体を開催するというのではない部分が非常に大きかった。開催の3年ぐらい前に、他県から実業団、学生のトップレベルの人間をいろんな形で開催県に引っ張ってくる。その戦力で優勝する。したがって、その選手の選手生命が終わればまた元の出生県に戻ってしまう。これではその時だけの日本一であって、その後の財産として残らない。いま小学校低学年にいる子供が10年後に高校生になる、高学年にいる者がいわゆる青年の部に、いま高校生、大学生が指導者になる。こうしたできるだけ宮城県に深い関わりのある人たちだけで何とかしたい、そして定着させたいと考えている。

（質問）企業としての生涯スポーツへの取り組み方という2つあると思う。一つは社員個々のニーズを重視し、企業がそれを側面からフォローする方法。もう一つは、企業や会社全体で取り組んでいくという2つのやり方があるのではないか。これからの企業はどちらの姿勢をと

っていくのかお聞かせ願いたい。

（松宮）ご質問に対する答えとしては、私は両方という答えを申し上げたい。まず、企業としてはこれから、従業員が本当の意味で幸せにならなければいけない、幸せ観をもった従業員でなければ企業の発展はないと思う。従業員が様々な価値観をもつ、この価値観に企業は経済的、時間的、様々な支援をしていく。これは企業の当然の義務だと思う。したがって、個々人のニーズにできるだけ支援をしていくということだと思う。また一方で、「メセナ」という言葉があるが、これからの企業は一つの企業のことだけを考えていてはだめで、文化やスポーツ、ボランティアなどの媒体を通して、地域に貢献していかなければならない。そういう意味では、どちらが優先するというのではなくて、意味合いが違うと思う。

（司会）最後に、学生に対する期待、要望を含め、一言ずつお願いしたい。

（宮崎）教員採用試験の結果が昨日発表されたが、非常に厳しい状況である。高等学校体育は特に厳しいと私自身びっくりしている。特に皆さん方には試験勉強をまず沢山して頂きたいと思う。それから実技の試験、私も見せて頂いたが、これがいわゆる専門教科の受験生の実技だろうか、とそう素朴に思った。いかにもレベルが低い。皆さんが試験を受ける心得だが、教育委員会ではけっして専門的な技術がどの程度身についているかどうかということ、つまり陸上競技なら陸上競技、サッカーならサッカーの選手としてどのくらい強いかということを見ているわけではない。いわゆる試験官を生徒と思って頂きたい。生徒の前で、たとえばマット運動をどう見せるかという立場で実技の試験を受けて頂くと、ちょっと違った実技になるんじゃないか。非常に無造作に前転をゴロンとやる。小学校の3年生がやる前転と体育大の学生がやる前転とがほとんど変わらない。少し意識の持ち方を変えて頂きたい。砲丸投げの課題の場合、

15メートル投げる人、20メートル投げる人、これは専門的なことをやった人とやっていない人では全然違う。ただ、子どもたちに、砲丸はこういうふうに投げるんだと教えるようなレベルでの実技を、4年間の間で身につけてほしいと思う。

学校の先生になった場合、企業や市町村の役場の中で指導者としてやる場合と基本的には同じであるが、特に学校の場合は、保健体育の教員に期待される部分がものすごく大きい。当然のことであるが、教科担任としてきちっと仕事をして当たり前。それからクラス担任の仕事をし当たり前。校務分掌をいろいろこなして当たり前。その他に体育系の人間としてはクラブ指導、部活指導があり、これも数学の先生、英語の先生が顧問である場合と比べて、できて当たり前、勝って当たり前である。何をやっても当たり前といわれるのが、体育の教員である。したがって、どこで穴をあけても悪口をいわれることになる。非常に大変であるけれども、学校の教育活動全部をきちっとやれることが期待されている。

一般的に体育の授業そのものをおろそかにしている先生がものすごく沢山いる。しかも体育の授業とは、グラウンドなり、体育館なり、いつも公開の授業のかたちでやっている。体育の授業だけはみんなにいつも見られるわけである。

それで「あんな授業だったら俺だってできる」という感じで、他教科の先生が体育の授業を担当している場合もある。これは人が足りないことからなんだが、専門家がやる体育の授業と、英語の先生がかつて運動部の経験があるということで行っている体育の授業と同じだとしたら、これはたいへん問題である。そういうことがないように、専門家は専門家らしい取り組みの仕方をする必要がある。

それから今現在、体育の教員であり大した体育の先生でないとと言われる人間も相当いる。本人に責任がある場合と、周りに責任がある場

合がある。先輩教師が悪い場合、相当意識の高い者でも、だらしのない授業を見てしまうと、だいたいこんなふうでいいということで慣らされてしまうわけだ。いま教員になりたいと思っている時の気持ち、その気持ちをどんな環境に遭った場合でも、先輩が少しおかしいんじゃないかと最初に感じた気持ちを何年間も継続してもってほしい。われわれは縦社会に生きており、先輩、後輩の関係に縛られて、これはおかしいんじゃないかと言えない場合もある。言えればそれにこしたことはないが、言えなくとも自分だけは合わせないでやっていくという気持ちをもっと頂きたい。その学校にいる体育の先生はもちろんであるが、学校の中でいい活動をしている先輩教師の後ろ姿、背中を見て、それに何とか近づこう、追い越そうという気持ちを常にもって頂きたいと思う。

それから生涯教育に関わることであるが、学校とか、自分の所属する学校の活動だけにとらわれることなく、あるいは企業では企業内の活動だけにとらわれるのではなく、ボランティアとしての活動を、専門家として、特に自分の住んでいる地域や、学校、企業のある地域の中で活動して頂きたい。

地域には専門家が少なく、専門的な知識を身につけ、技術を身につけた人に期待しているわけである。これに応えてやってほしい。これはボランティア活動しかない。学校の中で、部活動などで夢中になっていると、どうしても地域に目が向かなくなる。何とか時間を見つけ、あるいは作って、地域にお世話する気持ちをもってもらおうと生涯スポーツも発展するのではないかと思う。(拍手)

(鈴木) 企業の方のご意見を聞きながら、先日河北の記事そっくりと思った。たぶん社説であったが、何て書いてあったかと言うと、30歳代から50歳代までの、いわゆる中高年層、特に男性の体力の低下、それに加え、小学校から中学校の10代の子どもたちの4割近くがテレビ

ゲームに夢中になっている。この子どもたちが次つぎ大人に育っていったら、スポーツを見るだけになっていくのではないかと大変心配だを書いてあった。私ども教育委員会では、子供たちをスポーツに馴染みながらスポーツに憧れをもつような人間にすべく努力している。その際、やっぱり目標となる人たちがいることが望ましい。学生諸君よ、ぜひ素晴らしい成績を挙げ町民の目標になって頂きたい。(拍手)

(松宮) 私も高校時代にスポーツをしており、国体、インターハイの経験がある。就職する際、「おまえは頭は悪いかもしれないが、企業に入ったら、このスポーツに賭けた情熱を企業の中で賭けてみろ」と父親が言ってくれた。それを今までやってきたと思う。いま50歳、まだ夢をもっており、これからも頑張っていきたいと思う。スポーツに青春を賭けた学生の皆さんも、これから社会に出て行くわけだが、そのガッツで素晴らしい人生を送って頂きたい。(拍手)

(長島) 企業の立場から、われわれが人を採用する時の一番の条件は何かと言うと、皆さん方がスポーツでいろいろ熱中してきたそのもの、要するに皆さんが今生きているその段階で何をやって来たのか、それからその情熱をどう企業の中で活かし得るのか、ということである。何かに一所懸命打ち込んだ者は必ず他のことでも十分やっていける。単に、体育そのものをわれわれに提供するだけではなく、そういう考え方、意識を持ち合わせてほしい。したがって、いろいろなことができないといけないし、そのためにはいろいろと勉強して頂きたい。(拍手)

(佐藤) 柴田町との関係で一つご提案したい。夏休みになると子供たちが6時半頃に目をこすりながら、公園や空き地にラジオ体操をしに集まる。ぜひ、家に閉じこもっている高齢者の方々に、たとえば春、桜の咲く頃、週に1回、6時くらいに河川敷に集まってもらい、ラジオ体

操なりストレッチ体操をして、桜の下を30分くらい歩く、そういうことを1週間に1回でもいいから行政でちょっと火をつけて頂きたい。1週間に1回あるいは2回、そういうことをやると皆さん好きになる。それが駅前であれ、団地であれ、河原であれ、高齢者のパワーを、マンパワーを活用して、特にグループをつくる。それを長く続けるためには、やはり年に1回くらいは非常に優秀な活動をしているグループに表彰状を与えるとか、あるいはペナントなどを与える。こういうことを2年、3年と続けていくと、必ずや柴田町の医療費も下がるということで、ご提案したいと思う。(拍手)

(近藤) 今日のテーマになっている「生涯スポーツ」、これは明らかに日本語である。生涯スポーツと関連する言葉に、生涯教育とか、生涯学習という言葉がある。1965年、フランスのポール・ラングランが『生涯教育入門』という本を出版しているが、日本で訳されて出版されたのは1970年である。その本の中に、これからの時代、スポーツは生涯にわたって実践されなければならない、その一番大きな目的は、身体的な文盲を無くすということであると書かれている。文盲とは字が書けない、字が読めない、したがって自分を表現できないということである。現在、統計によるとまだ地球上に65パーセントくらい文盲の方がいるんじゃないかと言われている。先進諸国でも30パーセントくらいいると言われている中で、日本の文盲率は1.6パーセントである。字が読める、字が書けるといようなことと同様、身体的な文盲を無くすというのが生涯スポーツの本来の目的であると、ポール・ラングランはおっしゃったわけである。

身体的な文盲というのは、やりたくてもできない人で、そういう人が沢山いる。世界に冠たる日本の学校体育、幼稚園から小学校、中学校、高校、大学と一貫して体育があり、非常にきちんと指導されているはずなんだが、いざ社会に出るとなかなかできない。非常に珍しい現象だ

と思う。身体的文盲というわけだが、いずれにしても、誰もが自分で体を通して自己表現、あるいは自己主張をする、そういうことが生涯スポーツで一番大事なことはないか。イギリスでのことだが、お年寄りもやはりいろんなスポーツをやっており、必ずしも日本のようにゲートボールだけというわけではない。80歳を過ぎた方でもボートを漕いだり、ラグビーをやっている。そういう一人ひとりのスポーツをもっている方に、「どうしてスポーツをやっているんですか」と伺うと、「This is my life」、つまり「これこそ我が人生だ」と答え

る。生涯にわたって自分のスポーツを実践し追求する。それは芸術家が生涯かけてライフワークとして大変素晴らしい作品を残すのと同じことである。そういうふうにスポーツは、まさに文化である。自分が生きてきたことの証として、本当に自分のスポーツをもつことができるか、そういう指導こそが、これからスポーツの世界で指導者として活躍しようとしている人たちには大事なことである。一緒に頑張っていこう。

(拍手)

(文責 丸山 富雄)